

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	venir de+inf.の発展過程について : 16世紀および17世紀のテキストの調査結果をめぐって
Author(s)	生田, 夏樹
Citation	フランス文学 , 24 : 1 - 13
Issue Date	2003-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041053">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041053</a>
Right	
Relation	



## *venir de + inf.* の発展過程について

— 16世紀および17世紀のテキストの調査結果をめぐって\*1 —

生 田 夏 樹

### 0. はじめに

フランス語の *venir de + inf.* は、最初は今日におけるように「近い過去」に関わる表現ではなかった。VETTERS (1989) によれば、古フランス語には近接過去は存在せず、中世においては *venir de + inf.* は専ら matériel な意味で用いられていた。<sup>1)</sup>ここで、*venir de + inf.* の matériel な意味とは、「infinitif で表される行為を主体が完了した場所を運動の出発点とする」ということで、例えば、

(1) Je viens de déjeuner.

という文を matériel な意味で解釈すると、「私は昼食をとった場所から帰って来た」という具合に、動詞 venir が持つさまざまな意味のうちで特に「帰って来る」という移動動詞としての意味が前面に出てくることになる。これに対して、いわゆる「近接過去」の意味は périphrastique な意味と呼ばれる。FLYDAL (1943)によると、「périphrastique な意味は15世紀に発生するが、*venir de + inf.* が今日のように périphrastique な意味でのみ用いられるようになるのは17世紀以降のことで、16世紀までは matériel な用法と périphrastique な用法とが混在していた」という。<sup>2)</sup>しかしながら、périphrastique な用法が matériel な用法に対して優位を占めるようになったのは17世紀に入ってからなのか、それ以前なのかという点に関してはこれまでのところ必ずしも明瞭になっていない。実際、ここに引用した FLYDAL のコメントは GOUGENHEIM (1929) における論述を簡潔明瞭に整理したものと位置づけられ、VETTERS も matériel な用法と périphrastique な用法に言及する際 FLYDAL の記述をほぼそのままの形で引用しているに過ぎない。つまり、この問題に関する限り VETTERS の記述も GOUGENHEIM の論考をそのまま踏襲していることになる。こうしたことから見て、périphrastique な用法が支配的になる時期をめぐる問題に関しては GOUGENHEIM の論考以後 VETTERS の論考に至るまで、相当量のコーパスを対象にしてより詳細な調査が行われた形跡はない。この問題を解明することにより、いつ頃 *venir de + inf.* が所謂「近接過去」として定着したかがより明確になる筈であ

る。

一方、我々は先に現代フランス語では *venir de + inf.* が単に近い過去を表すだけでなく、状況により「正当化する」、「関心を引く」、「想起を促す」などの具体的意味効果を帯び得ることを示した。<sup>3)</sup>こうした用法は、infinitif で表される行為の完了に関わる以上、当然 *venir de + inf.* が *périphrastique* な意味で用いられるようになってからのものであり、当初から存在したわけではない。そこで、「近接過去」からのこのようないわば派生的用法がいつ頃から見られるようになるかという点も興味深い問題である。

本稿では、

*venir de + inf.* が、現代フランス語におけるように「近い過去」に関係する表現として定着したのはいつ頃の時期か、

「近接過去」からの派生的用法はどの時代に遡るか、

という二つの問題提起を踏まえて、16世紀および17世紀のテキストを資料体として調査分析した結果について考察する。可能な限り多くのテキストを効率的に調査して *venir de + inf.* の用例を検索するために、今回は BN で提供しているサイトを中心にインターネットで入手できる電子テキスト化された文学作品を参照することとした。<sup>4)</sup>

## 1. 調査データを整理した結果

次に、16世紀および17世紀のテキストから検出された *venir de + inf.* の出現件数に関するデータを整理した結果について説明する。

グラフ1（本稿末尾付録）は、参照した資料体のうち、複数の作品からなるものについては可能な限り作品ごとに分けるようにして、それぞれの作品における *venir de + inf.* の出現件数を集計し、横軸に件数、そして縦軸には年代を上に向かうほど現代に近くなるようにとって棒グラフ化したものである。このグラフから、時代が現代に近づくにつれて出現件数の多い作品が登場し易くなっていく傾向が読み取れる。特に16世紀では、前期に比べて後期において M. de MONTAIGNE の *Essais* のように出現件数の飛びぬけて多い作品が現れ、さらに17世紀になると、この世紀全体を通じて、P. CORNEILLE の *Mérite*, *Clitandre*, *Polyeucte*, MOLIÈRE の *Le Tartuffe*, *Dom Garcie de Navarre*, などといった戯曲のみならず、La Fayette 夫人による *La Princesse de Clèves*, *Zaïde* のような小説をはじめとする散文テキストに出現件数の多いものが目立ってくる。

ただ、時代が現代に近くなるにつれて出現件数の多い作品が登場し易くなっているというだけでは、この動詞句の使用頻度が増加傾向にあるとまでは言い切れない。一口に出現件数といってもそれぞれのテキストのヴォリュームの違いを無視することは出来ないからである。つまり、テキストのヴォリュームが大きければそれ相応に出現件数も大

きくなる可能性が考えられる。そこで、資料体ごとに *venir de + inf.* が出現する度合いを相対的に比較するために、各資料体における出現件数を資料体の総語数で割った値に1000を掛けて算出したものを仮に頻度指数と呼ぶことにして、横軸に頻度指数、縦軸には年代を上に向かうほど現代に近くなるようにとって棒グラフ化するとグラフ2（本稿末尾付録）のようになる。これで見ると、16世紀に関しては *Essais* に加えて *Cléopâtre captive*, *Bradamante*, *Les Juives* といった戯曲の頻度指数がその他の資料体に比べて著しく大きくなっている。そして17世紀では16世紀に比較して全般的に頻度指数が一際高くなる傾向が認められる。実際、それぞれの世紀における頻度指数の平均値で比較すれば、16世紀の平均値が0.053なのに対して17世紀の平均値がその6倍以上もの0.349となることも、その傾向を裏づけている。従って、*venir de + inf.* は、この表現が matériel な意味を失った17世紀にいたって、使用される機会が一段と増した、と見ることができる。

## 2. 派生的用法

そこで、*venir de + inf.* に関して現代フランス語において観察されるような派生的用法が17世紀のテキストに見られるか、という問題に対する解答の提示に移りたい。17世紀に入って *venir de + inf.* が専ら périphrastique な意味で用いられるようになっただけでなく、その使用頻度も増すことになったのだとすれば、何らかの派生的用法が生じて来たとしても不思議ではない。今回17世紀の文学作品を調査したところでは、「正当化する」、「関心を引く」、「想起を促す」といった「近接過去」からの派生的用法と見なせる事例がいくつか観察されたが、紙数の関係上、こうした事例の詳細については『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第15号に掲載予定の拙論に譲るとして、ここでは派生的用法の事例を含む作品としては、今回調査した中で17世紀の最も早い時期に属する次の例だけを示すことにする。

- (2) N'était ce qui te presse, /Ta flamme un peu plus loin eût porté la tendresse, /Et je t'aurais fait voir quelques vers de Tircis /Pour le charmant objet de ses nouveaux soucis. /Je viens de les surprendre, et j'y pourrais encore / Joindre quelques billets de l'objet qu'il adore [...] (P. CORNEILLE, *Mélite*)

これは P. CORNEILLE の1629年に発表された戯曲 *Mélite* の一節で、Chloris がその恋人 Philandre に話しかけているところである。Chloris が「貴方に Tircis の詩を見せて上げられたのに」と言うことができるのは、その詩を密かに見つけたということが根拠になっている。従って、この例における動詞句 *viens de les surprendre* は、Tircis が書

いた詩を見つけたという単に近い過去の行為を表すにとどまらず、直前に言ったことを正当化する意味効果を帯びて用いられている。

このように「近接過去表現」からの派生的用法として、P. CORNEILLE の初期の作品 (*Mélie* や *L'Illusion comique* など) には既に「正当化する」という付随的意味効果を帯びたケースが見られ、また同じ作者による戯曲 *Polyeucte* には話者が聞き手に対して「想起を促す」ケースが出現する。さらに、MOLIERE の1660年代の喜劇 *Les Fâcheux* には発話の冒頭で相手の「関心を引く」意味効果を帯びたケースが認められる。

17世紀のテキストに「近接過去」から派生した用法が見られるのであれば、こうした用法はさらに時代を遡ることができるか、という点が問題になるが、今回、16世紀の主だった文学作品を調査した限りでは、そのような派生的用法は全く検出されなかった。ことによると、16世紀の段階ではまだ *venir de + inf.* は派生的用法を生み出すほどには表現として成熟していなかったのかも知れない。

### 3. 「近接過去表現」としての *venir de + inf.* の定着時期

次に、*venir de + inf.* の périphrastique な用法が matériel な用法に対して、いつ頃から優位を占めるようになったか、という点について考えてみたい。本稿末尾に掲げた16世紀の文学作品全て（総語数約1,045,000語）について、動詞句 *venir de + inf.* を検索した結果、合計70件検出された。périphrastique な用法がいつ頃から支配的になるか、という点を明らかにするには、これら70件の *venir de + inf.* の各々について matériel な用法と périphrastique な用法のうちの何れであるかを判定しなければならない。ところで、この動詞句が matériel な意味で用いられるのは、主体が infinitif の表す行為を完了した場所を起点とする移動を行ったという事実が殊更重要な意味を持つ場合のみである。しかも、これは、次の例におけるように *venir de + inf.* という表現が *D'où viens-tu?* のような場所の移動に関わる質問に対する返答の述部となりうる場合である。

- (3) *Fierabras*. D'où viens-tu, Perrine? — *Perrine*. Je vien de rendre le levain que la servante de leans m'avoit presté.

(Lariyey, *Les Jaloux*, III, 6; Ancien Théâtre françois, t. VI, p. 56)<sup>5)</sup>

従って、移動自体が問題になっていない限り、言い換えれば、文脈上 infinitif で表される行為の実現そのものが問題とされている限り、動詞句 *venir de + inf.* は périphrastique な意味で用いられていると見なして差し支えない。これをもって我々は、matériel な用法か périphrastique な用法かを判定する基準にすることができる。ここでは紙数の都合

上, その一例のみを示そう。

- (4) *Je viens de voir* chez moy un petit homme natif de Nantes, né sans bras, qui a si bien façonné ses pieds, au service que luy devoient les mains, qu'ils en ont à la verité à demy oublié leur office naturel. Au demourant il les nomme ses mains, il trenche, il charge un pistolet et le lasche, il enfille son aiguille, il coud, il escrit, il tire le bonnet, il se peigne, il jouë aux cartes et aux dez, et les remue avec autant de dextérité que sçauroit faire quelqu' autre [...]
- (M. de MONTAIGNE, *Essais*, Livre I, (A))

この例において, 第一の文の述部 *viens de voir* によって表されているのは, 主体すなわち筆者が件の小男に会った場所からの移動ではあり得ない, 何故なら, この文に続く部分を読めば分るように, ここで筆者の意図するところは彼が自宅で出会ったある障害者について語ることにあるからである。つまり, この例における *venir de + inf.* では最近その障害者に会ったことそれ自体が伝えるべき重要な情報になっており, *périphrastique* な用法ということになる。

調査した16世紀のテキストより検出された70件の *venir de + inf.* 各々について, この例に対して行ったのと同様の仕方で, 先に述べた判定基準を適用して検討した結果, 1件のみ *matériel* な意味と *périphrastique* な意味の何れにも解釈可能なものがあったが, それ以外は全て *périphrastique* な用法になっていることが確かめられた。しかも, これら70件の *venir de + inf.* は16世紀の中期ないしは後期の作品に出現したものであった。このことから, 17世紀の到来を待たずに16世紀中頃には既に *périphrastique* な用法が *matériel* な用法に対して優位を占めるようになっていたらしいことが分る。従って, 今後15世紀から16世紀前期にかけてのテキストについてコーパスの量を多くして調査した際, 定着の時期がさらに遡る可能性も排除できないが, 今回の我々の調査結果から判断する限り, 所謂「近接過去表現」としての *venir de + inf.* は16世紀半ば, あるいは遅くとも, M. de MONTAIGNE の *Essais* が刊行された16世紀後期にはほぼ定着していたものと考えられる。

#### 4. *venir de + inf.* の出現頻度とテキストの性格

我々の今回の調査は16世紀前期の文学作品をもカバーしているが, この時期に属するテキストからは *venir de + inf.* の出現が極端に少なかった。ここで注目を引くのは, 我々が調査したこの時期の文学作品に F. RABELAIS による一連の『ガルガンチュアとパ

『サンタグリュエル物語』 *Gargantua et Pantagruel* が含まれていることである。つまり、これほどの長編に *venir de + inf.* が全く出現しなかったことをどのように捉えるべきであろうか。この点に関しては仮説として二つの可能性が考えられる。すなわち、第一の仮説は、「元々 matériel な用法自体がかなり限られた状況でのみ用いられていたのに加えて、périphrastique な用法も発生して間もなく、まだそれほど一般的になっておらず、それに引き替えて他の何らかの競合する表現の方が支配的であったため、16世紀前期まではテキストの性格の如何にかかわらず *venir de + inf.* という形が使用されることの極めて稀な表現であった(?)」というものであり、また、第二の仮説は、「périphrastique な用法は16世紀前期の時点でも既にある程度浸透していたが、F. RABELAIS のテキストの性格にこの表現が馴染まなかった(?)」というものである。現時点では、これらの仮説のうち何れが妥当であるかを断定できるだけの十分なデータがない。

第一の仮説について検証するには、15世紀から16世紀前期にかけての *venir de + inf.* の使用頻度に関するより詳細なデータを得るために、今回検索の対象を電子テキスト化され、入手も容易な文学作品に限った関係上参照できなかったテキストにまで調査範囲を広げて、Frantext などの利用も視野に入れる必要がある。

これに対して、第二の仮説は、

*venir de + inf.* の出現頻度とテキストの性格との間に何らかの相関が認められるか。もし相関関係があるとするならば、それをどのような形で特徴づけ、具体的に定式化できるか。

という新たな問題提起と関わりを持つ。

頻度指数の推移を示すグラフ2を見れば分るように、17世紀だけで比べても、La Fayette 夫人の小説集で頻度指数0.788、これに対して La Fontaine の寓話詩集 *Fables choisies* ではその17分の1以下の0.045というようにかなりの開きがある。前者は散文テキストから成り、後者は韻文の形式をとっている。確かに、16世紀半ば以降に位置づけられる Du Bellay や Ronsard の詩集の場合を見ても明らかのように、概して散文に比べると詩では頻度指数が非常に小さくなるようである。しかし、同じ韻文でも P. CORNEILLE に代表されるような戯曲になると、詩の場合とは対照的に頻度指数が著しく大きくなる傾向がある。しかも散文テキストの間でも頻度指数の多寡が認められる。こうしたことを考え合わせると、*venir de + inf.* の出現頻度のバラツキを単に散文か韻文かの相違では説明することができない。

一方、現代フランス語で書かれた小説のうち、比較的 *venir de + inf.* が出現し易い

冒険小説やスパイ小説といった通俗的なものを読みながらこれまで観察してきたところでは、*venir de + inf.* が頻用されるテキストには次のような傾向が見られる。すなわち、物語全体を通して、比較的短い時間の流れの中で状況が速いテンポで進展し、新たな出来事が次々に発生したり、随所に場面の急激な変化が生じる、という傾向である。このようなことから、*venir de + inf.* の出現頻度はテキストの性格と無関係ではないことが推測される。特に、16世紀と17世紀との間で頻度指数に大きな差異が見られることは、16世紀までにはなかった性格のテキストが17世紀になって出現した可能性を反映しているかも知れない。従って、先に掲げた第二の仮説は、この相関性がより精密な形で定式化できたところで、再度検討するのが適当と思われる。

## 5. ま と め

16世紀および17世紀の主だった文学作品を調査したところでは、*venir de + inf.* は遅くとも16世紀後半にはすでに「近接過去」に関わる表現として定着していたと考えられる。そして、*venir de + inf.* は17世紀の中頃には既に「近接過去」からの派生的用法として、「正当化する」、「想起を促す」、「関心を引く」といった付随的意味効果を帯びて用いられるようになっていた。

しかし派生的用法の全てが17世紀の時点で出尽くしたわけではない。実際、現代フランス語では、「突発的な出来事の直接的原因を示す」、あるいは「登場人物の五感で知覚されたことを説明する」という派生的用法も観察される。<sup>6)</sup>こうしたタイプの派生的用法がどの時代に現れて来るかを明らかにするために、今後は18世紀さらには19世紀についても同様の調査を行うことが必要になる。

また、*venir de + inf.* の出現頻度とテキストの性格との間の相関性を定式化するには、テキストの特徴を反映するような何らかのパラメータを設定した上で多変量解析などのデータ解析を試みることも今後の課題として残されている。

### [注]

\*) 本稿は2002年度日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会での口頭発表を基にしたものである。発表の際に有益な御意見、御指摘をいただいた方々に心から御礼を申し上げる。

- 1) VETTERS, C. (1989) : Grammaticalité au passé récent, *Linguisticae Investigationes*, tome 13, fasc. 2, p. 370.
- 2) FLYDAL, L. (1943) : 'Aller' et 'venir de' suivis de l'infinitif comme expressions de rapports temporels, Oslo : Dybwad., p. 100.



- 3) 生田夏樹 (2001) : 「venir de + infinitif の用法をめぐる一考察」, 『フランス文学』第23号, pp. 5-7. LEBAUD (1992) はこの動詞句を「発話中に明示された事柄を正当化する」という機能のみによって特徴づけようとしている。しかし, 実際の用例を検討してみると, この動詞句が単なる事行の近い過去への位置づけでも正当化でもない意味効果を帯びて用いられるケースがあることを我々は指摘した。
- 4) 利用したサイトの URL と参照した作品 (もしくは全集) のリストについては本稿末尾参照。
- 5) この例は GOUGENHEIM (1929, p. 123) にも matériel な用法の例として引用されている。
- 6) これについての詳細は, 2002年刊行の『岡山大学文学部ヨーロッパ言語文化研究』第21号掲載の拙論を参照。

#### [参考文献]

- FLYDAL, L. (1943) : *'Aller' et 'venir de' suivis de l'infinitif comme expressions de rapports temporels*, Oslo : Dybwad.
- GOUGENHEIM, G. (1929) : *Etudes sur les périphrases verbales de la langue française*, Paris : Nizet.
- 生田夏樹 (2001) : 「venir de + infinitif の用法をめぐる一考察」, 『フランス文学』第23号, 日本フランス語フランス文学会中国・四国支部, pp. 1-11.
- IKUTA, N. (2002) : La périphrase *venir de + infinitif* exprimant la «contiguïté» ou la «simultanéité», *Études de Langue et Littérature Européennes, Université d'Okayama, n° 21, pp. 93-104.*
- LEBAUD, D. (1992) : *Venir de infinitif : localisation d'un procès dans un passé récent ou spécification d'un état actuel ?*, *Le Gré des Langues* 4, pp. 162-175.
- VETTERS, C. (1989) : Grammaticalité au passé récent, *Linguisticae Investigationes*, tome 13, fasc. 2, pp. 369-386.

#### [利用したサイトの URL]

- ABU (<http://abu.cnam.fr/>)
- ATENA ([http://un2sg4.unige.ch/athena/html/fran\\_fr.html](http://un2sg4.unige.ch/athena/html/fran_fr.html)),
- Gallica Classique (<http://gallica.pnf.fr/Classique/>),
- Trismégiste (<http://www.chez.com/trismegiste/>)

## [参照した作品（もしくは全集）のリスト]

（それぞれの資料体の大きさを示すに際しては、語数（mots）を単位に採用した。）

16世紀：

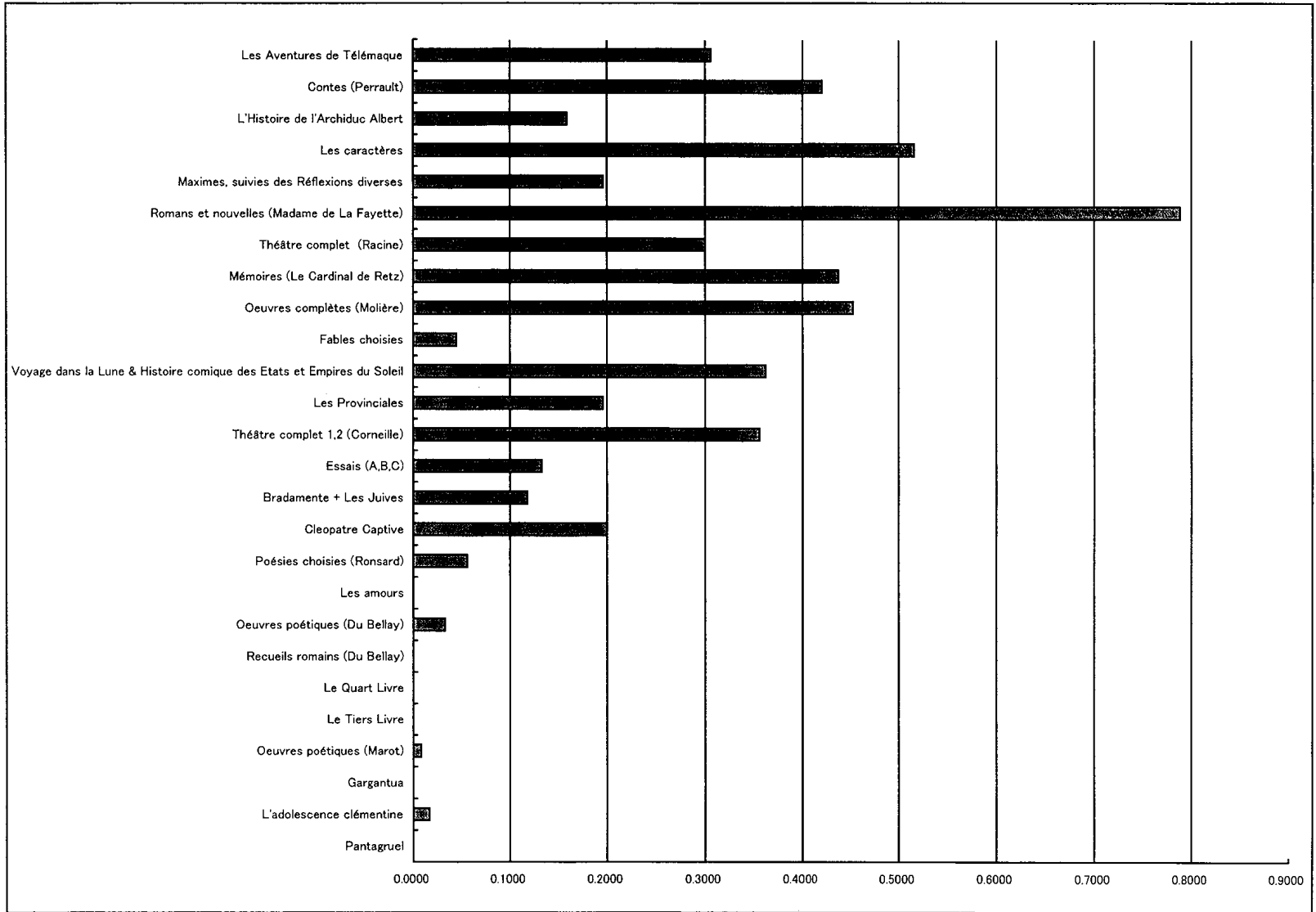
J. Du Bellay, *Recueils romains*, Texte établi par Daniel Aris et Françoise Joukovsky, Collection Classiques Garnier. Taille: 20.000 mots. /J. Du Bellay, *Oeuvres poétiques*, Texte établi par Daniel Aris et Françoise Joukovsky, Collection Classiques Garnier. Taille: 30.000 mots. /R. Garnier, *Bradamante et Les Juifves*, Texte établi par Marcel Hervier, Collection Classiques Garnier. Taille: 34.000 mots. /É. Jodelle, *Cleopatre captive*, Version html éditée à ATHENA, Copyright © 1999 ATHENA - Pierre Perroud. All Rights Reserved. Taille: 10.000 mots. /C. Marot, *Oeuvres poétiques*, Texte établi par Gérard Defaux, Collection Classiques Garnier. Taille: 120.000 mots. /C. Marot, *L'adolescence clémentine*, Texte établi par Gérard Defaux, Collection Classiques Garnier. Taille: 59.000 mots. /M. de Montaigne, *Les Essais, Livre I, II, III*, Version HTML d'après l'édition de 1595 à Trismégiste. Taille: 430.000 mots. /M. de Navarre, *L'heptaméron*, Texte établi par Michel François, Collection Classiques Garnier. Taille: 82.000 mots. /F. Rabelais, *Gargantua*, ATHENA e-text, numérisé par François Bon. Taille: 44.000 mots. /F. Rabelais, *Pantagruel*, ATHENA e-text, numérisé par François Bon. Taille: 37.000 mots. /F. Rabelais, *Le Tiers Livre de Pantagruel*, ATHENA e-text, numérisé par François Bon. Taille: 53.000 mots. /F. Rabelais, *Le Quart Livre de Pantagruel*, ATHENA e-text, numérisé par François Bon. Taille: 59.000 mots. /P. de Ronsard, *Les amours*, Texte établi par Henri Weber, Collection Classiques Garnier. Taille: 31.000 mots. /P. de Ronsard, *Poésies choisies*, Texte établi par Françoise Joukovsky, Collection Classiques Garnier. Taille: 36.000 mots.

17世紀：

Anonyme, *L'Histoire de l'Archiduc Albert*, Texte produit par G. J. Swaelens, ABU. Taille: 113.000 mots. /P. Corneille, *Théâtre complet (tome 1)*, Texte établi par Georges Couton, Collection Classiques Garnier. Taille: 180.000 mots. /P. Corneille, *Théâtre complet (tome 2)*, Texte établi par Liliane Picciola, Collection Classiques Garnier. Taille: 28.000 mots. /Cyrano de Bergerac, *Voyage dans La Lune & Histoire comique des états et empires du Soleil*, Texte produit par Jean-Paul Bret, ABU. Taille: 47.000 mots. /Fénelon, *Les aventures de Télémaque*, Texte établi par Jeanne-

Lydie Goré, Collection Classiques Garnier. Taille: 49.000 mots. /J. de La Bruyère, *Les caractères ou Les moeurs de ce siècle*, précédé de *Les caractères de Théophraste*, Texte établi par Robert Garapon, Collection Classiques Garnier. Taille: 31.000 mots. /Mme de La Fayette, *Romans et nouvelles*, Texte établi par Alain Niderst, Collection Classiques Garnier. Taille: 151.000 mots. /J. de La Fontaine, *Fables choisies*, Texte établi par Georges Couton, Collection Classiques Garnier. Taille: 44.000 mots. /F. de La Rochefoucauld, *Maximes*, suivies des *Réflexions diverses*, Texte établi par Jacques Truchet, Collection Classiques Garnier. Taille: 107.000 mots. /Molière, *Oeuvres complètes 1, 2*, éd. par Robert Jouanny, Collection Classiques Garnier. Taille: 247.000 mots. /B. Pascal, *Les provinciales*, éd. par Louis Cognet et Gérard Ferreyrolles, Collection Classiques Garnier. Taille: 97.000 mots. /C. Perrault, *Contes*, Textes établis par Gilbert Rouger, Collection Classiques Garnier. Taille: 38.000 mots. /J. Racine, *Théâtre complet*, Texte établi par Jacques Morel et Alain Viala, Collection Classiques Garnier. Taille: 70.000 mots. /Cardinal de Retz, *Mémoires 1, 2*, Textes établis par Simone Bertière, Collection Classiques Garnier. Taille: 32.000 mots.

グラフ 2 (頻度指数の推移)



グラフ 1 (出現件数の推移)

